

「お？」

「あっ」

「ん？」

大型書店の入り口で、ぱったり出くわした三人の口から零れ落ちた声。それぞれ違う制服を身に纏い、雰囲気もバラバラの三人は、共通している事といえばみな十七歳という事だろうか。

だが彼らは家族ぐるみの付き合いで、子供の頃から仲が良い。

『お？』と珍しいものでも見つけたかのような声を発したのは、辰巳匡成《たつみまさなり》。黒い学ランを身に纏う彼の身長は百七十五センチ。幾らか目つきが悪いのは、実家の家業が極道であるせいだろうか。

『あっ』と楽しいものでも見つけたように無邪気な声を出したのは、篠宮征悟《しのみやせいご》。進学校で有名な都立高のブレザーを身に纏う彼の身長は百六十センチ。小柄で優しい顔立ちが小動物を思わせた。

『ん？』とただ反応しただけのような無感情な声を出したのは、須藤雪人《すどうゆきひと》。有名私立高の、仕立ての良い制服を纏った彼の身長は百七十八センチ。帝王然とした雰囲気は御曹司と呼ぶに相応しい。

立ち止まった三人は思わず顔を見合わせた後、小さな喫茶店のボックス席に陣取った。

「駄目だ。最近良い女がいねえ」

「まあ、飽きてはきたな」

「二人とも相変わらず遊んでそうだよな...」

ストローを齧ったまま、征悟が向かいに座る二人を見る。二人が好んで特定の相手を作らない事は征悟も良く知るところだ。

「言えた義理じゃねえだろうがお前はよ」

言いながら、匡成の指が征悟の額を弾いた。

「痛っ」

「これまで何人不倫した？ 言ってみろタコ」

「三人に一人くらい...？」

悪びれた様子もなく小首を傾げてみせる征悟は、可愛らしい顔立ちのせいか年上に頗るモテる。

「タツだって人の事言えなくない？」

「俺は別に年下でも構わねえんだよ。一緒にすんな」

「どっちもどっちだろう」

呆れたように言う雪人は、付き合う前に相手を調べる。既婚者はおろか、口が軽そうな女には手を出した事がない。

「そういえば聞いてよ。僕さ、男に告白されたんだけど...」

「まあ、征悟は可愛らしい顔してるしな」

「お前なら俺も抱ける気がするわ」

慰めるどころかあっさり抱けるなどと言われて征悟はがくりと項垂れる。いくら可愛い顔をしていようが、男なのだ。

「あー...男って手もあんのか」

「本当にお前は節操がないな匡成」

「遊びなんて楽しけりゃなんでもよくね？」

「まあ、確かに」

慰める気配もなければむしろ男もたまにはいいんじゃないかと、そんな話になってしまった三人は更に一時間後、高級ホテルの部屋にその身を置いていた。

「おー、寝心地最高じゃねえか」

「あはははっ、人がゴミのようだー」

大きな寝台の上にごろりと寝転がる匡成と、ケタケタと無邪気に窓から景色を見下ろして笑う征悟である。もちろん、部屋を押さえたのは雪人だった。

奇しくも今日は金曜日。翌日は三人とも休みで、三人とも家に電話を入れて相手を告げればあっさり外泊許可がおりた。

「子供かお前らは」

「えー？ だってこんな部屋、滅多に泊まれないし」

「俺も、金持ちのババアにゃ興味ねえからなー」

いけ好かねえ。と、そう言って渋い顔をする匡成だ。

「それはいいが、上着くらい脱いでから寝たらどうだ。皺になるぞ」

「あー？ ああ」

呆れたような雪人の声に、匡成が寝台の上でその身を起こす。あっさりと学ランを脱いだ匡成は、脱いだ上着を雪人へと放り投げた。

「ほらよ」

「お前は...」

「いいじゃねえか。ついでだろ？」

渋い顔をしながらも匡成の上着をハンガーに吊るす雪人である。

「征悟、風呂」

「はいはい」

パタパタとスリッパを鳴らして素直にバスルームへと向かう征悟に、匡成が笑う。

「おー。お前はいい嫁になれそうだな征悟」

「僕はお婿さんになるの！ タツのお嫁さんになる人は、大変そうだね」

朗らかに笑いながら返す征悟の背中が壁の奥に消えて、匡成は再びごろりと横になった。家に帰れば世話役がいる匡成である。身の回りの世話を他人に焼かせるなど当然の事だった。

もとより湯の張られた浴槽に、すぐに戻ってきた征悟が匡成の隣にころんと寝転がる。

「ふかふかだあ〜」

「くっ、ちょっとこっち来いよ征悟」

「うん？」

ちょいちょいと征悟を手招いて、匡成はその唇を躊躇いもなく奪った。

「っふ...う！？」

驚いたように見開かれた征悟の目は、だがあっという間にトロンと気持ち良さそうなものへと変わる。くちゆくちゅと水音をたてて、匡成は征悟の口腔を舌で蹂躪した。

「あう...んっ、っふ。タツ...激しい...」

やがて透明な糸を引きながら離れた唇に、そう言って征悟がクスクスと笑う。その腕は、しっかりと匡成の首へと回されていた。

甘い雰囲気을漂わせて見つめ合う二人に、雪人は小さく肩を竦めて踵を返す。

「ユキー？」

「先に風呂に入りたい」

「んじゃ、俺らも入ろうぜ」

まるで恋人にでもするように肩を抱く匡成は、確かに男の征悟から見ても男らしくて頼もしく感じてしまうから不思議だ。

男子高校生が三人で入ろうとも余裕のある広い浴槽で寛ぎ、腰にタオルを巻いただけの姿で寝台へと上がった三人ではあったのだが、そこにきてふと顔を見合わせた。

「で？ 誰が女の子役？」

「お前だろ？」

「なんで僕なの！？」

「外見的には征悟だろうな」

「いやそれは間違ってる！ 見た目とか身長関係ないから！ 僕も男だからね！？」

断固として譲らないと喚く征悟に、匡成と雪人が顔を見合わせる。

「仕方ねえなあ...じゃあインディアンポーカーでどうだよ？ 勝ち点が一、負けがマイナス二。五点先取か失点でケツが女役な」

「いいだろう」

「乗った！」

そしてきっかり十分後、盛大なガッツポーズをしてみせたのは征悟である。

「やった！」

「って事は俺が三点、雪人が一点だったよなあ？」

「く...っ」

「ユキが女の子決定～」

はしゃぐ征悟と、ニヤリと笑う匡成に挟まれて、雪人は諦めたように溜息を吐く。匡成の手が雪人の喉元を撫であげた。

「優しくしてやるよ、雪人」

「嫌味か」

「はあん？ 何だよお前、賤られんのが好みか？」

「そんな訳があるかつ」

匡成は喉を鳴らして笑うと雪人を背後から抱きしめた。

「なっ...ちよつと待て匡成...」

「大人しくしとけ」

言いながら、匡成の指が雪人の胸の小さな飾りをぐにりと押し潰した。雪人が小さく息を詰める。

「はっ...待てって...」

「往生際が悪いな雪人」

「そうだよユキ。負けたんだから大人しくして」

可愛い顔をしながら、征悟の手が遠慮もなく雪人の腰に巻かれたタオルを剥ぎ取った。

匡成の胸に抱かれたまま剥き出しにされた屹立を征悟に正面から眺められ、雪人は困惑と羞恥に息を漏らす。

「っは...、.....悪趣味が過ぎる...」

「お前のその恥じらいは、なかなかくるな」

喉を鳴らしながら、匡成は片手で雪人の唇を器用に割り開く。

強引に歯列を抉じ開けて入り込んだ節の高い指を雪人は諦めて受け入れた。啞内を蹂躪する指先に気を取られていれば、萎えた屹立をゆるりと撫でられる。

「ッ...ひえい...ごっ」

口腔の指に上手く言えず、雪人は増々羞恥を募らせた。

「僕よりおっきい...」

「ばあか、身長差考えろよ征悟」

「そうだけどさあ...でもこれ、整いすぎじゃない？」

どれ...と肩越しに匡成が覗き込む気配があって、雪人の耳朶に吐息が触れる。くすぐったいような気持ち良いような、感じた事のない感覚に捕らわれた。

拙いとそう思った時にはもう手遅れで、雪人の雄芯は見る間に質量を増していく。

匡成がわざとらしく耳元で囁いた。

「何お前、耳感じんのか」

「違っ、.....ひッ」

耳の後ろをザラリとした感触に舐めあげられて、雪人の否定の声は掻き消された。耳の中まで無遠慮に入り込んだ舌先が水音を脳内に響かせる。その間も指先で捏ね回されたままの胸の突起は、存在を主張するように硬く尖っていた。

「っあ、...待つ...」

「あー...やべえ。勃ったわ」

「あははっ、タツの節操なし」

「いや、雪人もなかなか」

満足げに呟く匡成の手であっさりと躰をひっくり返された雪人の目の前には、凶悪なほどの質量を持った雄が反り勃っていた。